

小児歯科と子ども学

渡部 茂 (明海大学歯学部形態機能成育学講座 口腔小児科学分野教授)

子どもの口の中は、生活を表している。ある子の口の中を小児歯科医が診ることは、その子が今どのような生活をしているのかといったことを感じるに等しい。

小児歯科は「子どもの虫歯や歯並びを治すところ」という認識が一般的だと思われるが、それだけではない。小児歯科医は子ども時代を長期間、定期的に観察できる立場にあることから、口腔疾患の背景にある様々な情報をキャッチすることができる。口の中だけを見るのではなく、一歩踏み込んだ総合的な子育て支援の枠の中で専門性を発揮すること、それが子どもの健康を預かる医療分野としての小児歯科と定義することができる。

最近の子どものう蝕数の減少は、彼らの新たな生活情報を我々に提供することとなった。親の口腔衛生に対する理解によってう蝕数が減少したことにより、一部の親の無視、放置によるう蝕が露呈してきた。今まで全く見えていなかった、親によるネグレクトという事実が、物言わぬ子どもの口腔に、う蝕という思いがけない証拠として現れてきたのである。小児歯科医には、それを口腔のサインとして読み取り、速やかに行動することが求められている。

また、子どもの歯並びの治療は、すべて健康保険適応外とされている。このことが通院をしにくくし、結果的に子どもの心に重くのしかかる問題を生んでいる場合もある。出っ歯、受け口などとあだ名がつき、あだ名がつかないまでも、それがその子の人格を損ない、他との対等性をも失わせている。また、歯並びは咀嚼

や発音など、口腔機能にも影響が生じる。しかし、これらは病気とはみなされず、治療するためには多額の費用が必要となる。そこには、一生やむなく自分の個性として受け入れていかざるを得ない現実がある。小児歯科医はこのような子どもの現状を分析し、子どもたちのために、不整咬合が心身に及ぼす影響についてのEBMを社会的に訴えていかなければならない。

歯の外傷は、毎年多くの子どもの宝石のような歯をだめにしてしまう。事故は一見防ぎようのない突然の出来事として発生するが、原因を科学的に分析し、そこに潜む必然性を見出すことができれば、減らすことが可能となる。乳歯の外傷が1～2歳児に最も多く発生することからもわかるように、子どもの事故は心身の発達と密接に関係している。小児歯科は、外傷歯の治療だけではなく、発育に応じた事故予防対策を行うことで、子ども社会により多く貢献できる。

子どもたちは、さまざまな大人たちの支えがあって成長していく。子どもを取り巻く多くの専門家たちが連携をとらなければ、子どもたちの世界は決してよくならない。小児歯科はその中であって、極めて横断的で、他の領域との関連が深く、Advocatorとしての役割を十分に発揮できる領域であると強く意識している。

—プロフィール—

1977年、岐阜歯科大学(朝日大学歯学部)卒業。同大学助手、北海道医療大学歯学部講師・同大助教授を経て1985～1987年にManitoba大学客員教授(Oral Biology)。1995年から明海大学歯学部教授・同大学院教授。